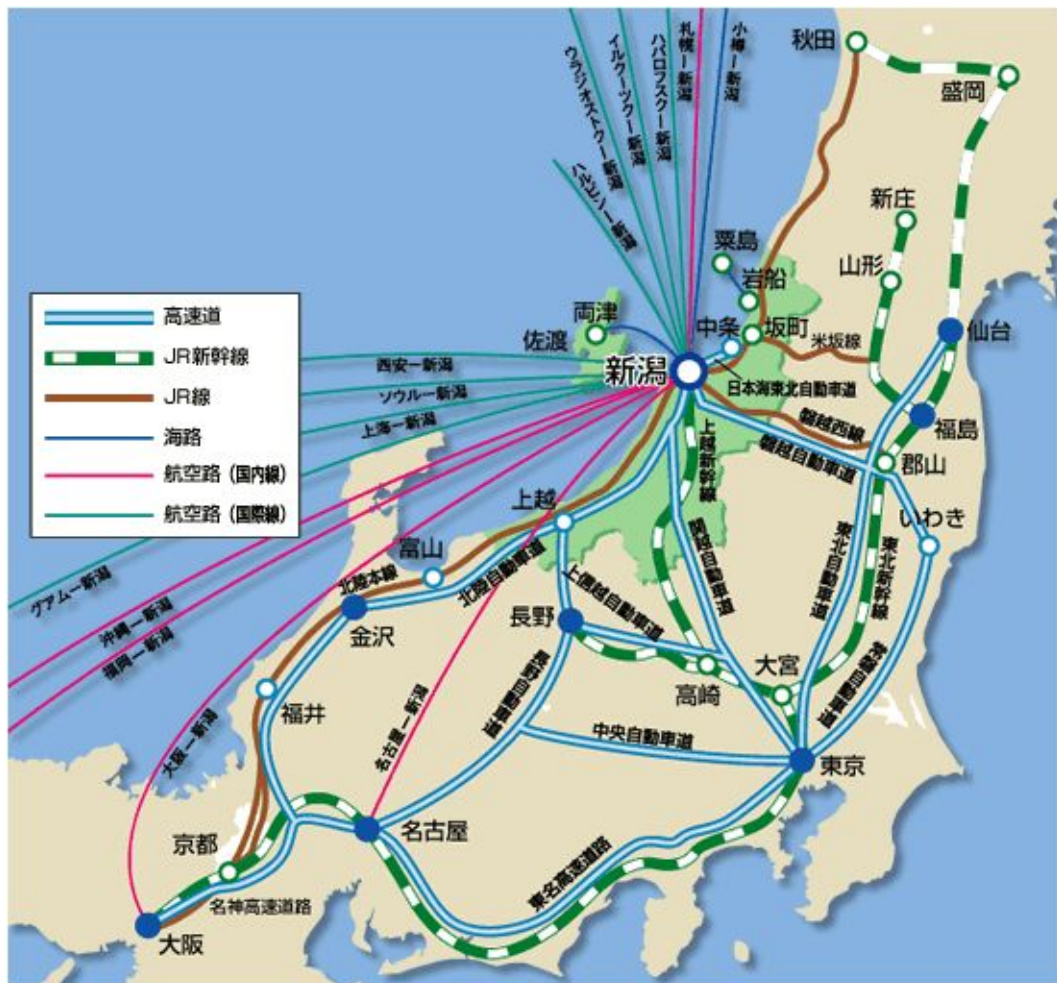


## 事例番号 061 Jリーグチームで地域振興(新潟県新潟市)

### 1. 背景

新潟市は新潟県の中西部、日本海沿岸に位置する新潟県の県庁所在地である(2000年の人口は約52万7千人)。信濃川と阿賀野川の河口に広がる沖積平野の上に発展し、海に沿って続く砂丘と鳥屋野潟、佐潟(ラムサール条約登録湿地)、福島潟などの数多くの潟湖を持つ。郊外には潟を干拓した広大な水田が広がっている。

新潟のまちは江戸時代初期に西廻り航路の寄港地と定められてから新潟湊を中心に発展し、幕末には日本海沿岸唯一の開港場に指定された。近代以降は交通機関の整備とともに発展し、現在は石油、金属、化学、機械、木材、製紙等で県内一の工業集積地となった。交通環境の面では上越新幹線、関越自動車道、北陸自動車道等が整備され、例えば東京からは上越新幹線で約2時間の時間距離にあるなど、大都市圏への良好なアクセスを持っている。1996(平成8)年には中核市に指定された。2005(平成17)年3月には近隣の12市町村と、同年10月にはさらに巻町と合併し、多様な歴史と文化を持つ人口81万人の新しい新潟市が誕生した。この合併で新潟市は本州日本海側最大の都市となり、2007年4月には政令指定都市移行を目指している。



新潟市の位置 (資料:新潟市ホームページ)

新潟市の中心市街地は、信濃川左岸(西側)の旧新潟町と右岸(東側)の旧沼垂町の 2 箇所を中心に栄えてきた。萬代橋(万代橋)が両地域を結び、この橋が架けられてから万代橋を中心に市街地が拡大していった。1950 年代後半からは現在の JR 新潟駅を中心とする地域の開発が始まる一方、鳥屋野潟周辺の小規模湖沼の干拓が行われ、乾田化が旧市域である曾根木、両川、大江山地域や亀田、横越地区にまたがる亀田郷、新津・小須戸地区の新津郷、白根地区などで行われた。さらに、1964(昭和 39)年 6 月に発生した新潟地震以降は、市内の国道、鉄道路線に沿った地区で徐々に宅地化が進行した。これらの結果、現在の市街地は海岸に沿うように北東から南西にかけて細長く伸びている。

このように市街地が外延化する一方で、新潟市の中心市街地である古町、万代・沼垂、新潟駅周辺地区では、市域全体に対する人口割合、商店数割合、年間小売販売額割合が低下してきた。定住者の高齢化率も高まり、中心市街地の活気が失われてきた。

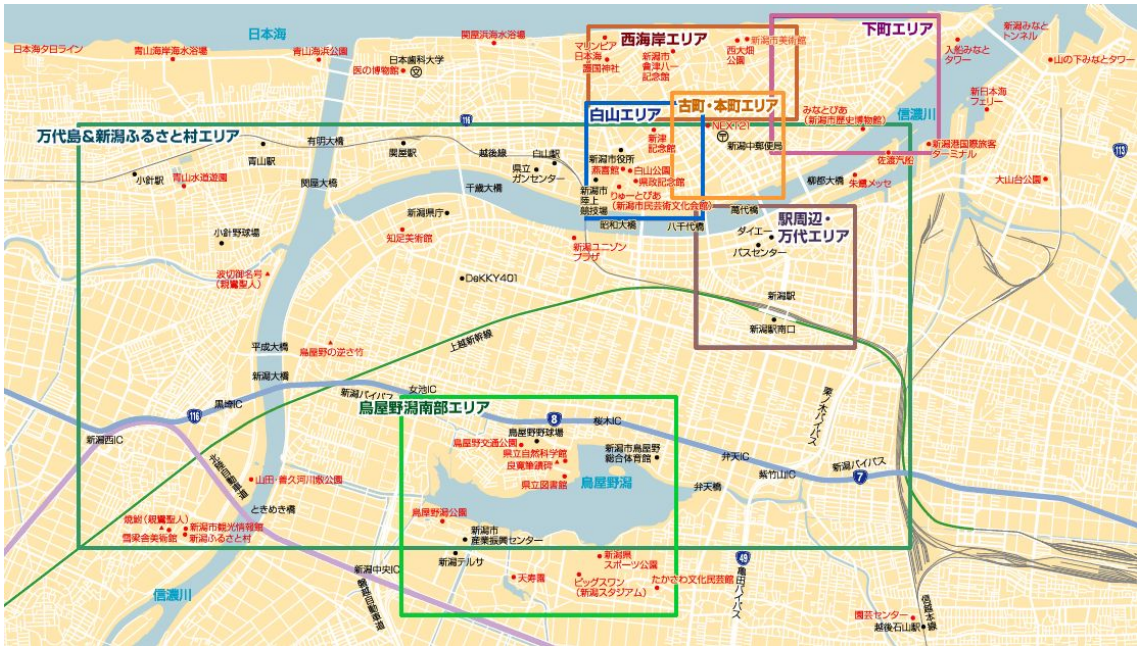
このような中、1992(平成 4)年に新潟市はワールドカップ 2002 開催候補地に立候補した。そして、開催地の条件として国際サッカー連盟(FIFA)の基準を満たすスタジアムを整備する必要があったことから、ワールドカップ後にそれを計画するため Jリーグチームを持つことが検討された。

スタジアムは JR 新潟駅南側に予定されていた鳥屋野潟南部開発(約 270ha)の一画に建設されることとなった。また、1996(平成 8)年に新潟市が開催地に決定されると、当時地域リーグで活躍していた既存チーム「新潟イレブン」(サッカー愛好者の集まり、昭和 30 年頃発足)を発展的に組織変更して「アルビレックス新潟」が設立されることとなった。サッカーに関するこのような活動の拡大は街に活気をもたらすとともに中心市街地に経済波及効果を及ぼすことが期待された。

新潟市には従来、全国レベルでの強い実業団スポーツチームが少なく、比較的大きなスポーツ試合の開催も少なかった。それが「アルビレックス新潟」の発足を機に、官民協働による地道な活動も効を奏して、「スポーツ不毛の地」「サッカー不毛の地」と言われていた新潟市に多くの観客が集まるようになった。「アルビレックス新潟」は地域密着型のスポーツクラブとして多くのサポータを抱え、まちづくりや地域のスポーツ振興にも大きく貢献している。



新潟市内上空から (資料:新潟市)



新潟市中心部 (資料:新潟市ホームページ)



鳥屋野潟南部エリア地図 (資料:新潟市ホームページ)

## 2. 目標

### (1) 新潟市第四次総合計画

1996年に策定された「新潟市第四次総合計画」(計画期間:1995～2006年度)は、まちづくりの基本理念を「市民一人ひとりが光り輝き、人間として尊重される市民主体都市の創造」とし、新潟市の将来像として以下の4点を掲げている。

- ① 一人ひとりが大切にされ、いきいき生きる<健康福祉都市>
- ② 自然と調和し、安心してゆうゆう暮らす<快適生活都市>
- ③ 個性ある文化をはぐくみ、豊かな心がのびのび育つ<文化創造都市>
- ④ にぎわいと活力に満ち、環日本海にいよいよ躍動する<中枢拠点都市>

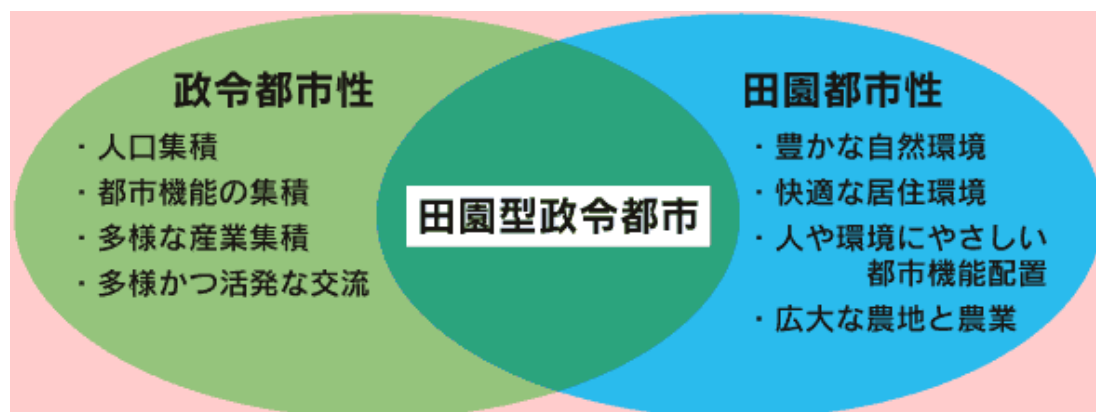
同計画は「スポーツ・レクリエーション活動の振興」に関する施策として、生涯スポーツの振興や市民が気軽に利用できる施設の整備、新潟市の特性を活かしたスポーツ・レクリエーションの振興や国際スポーツ交流を推進するとした。

### (2) 中心市街地活性化基本計画

2000(平成12)年3月に策定された「中心市街地活性化基本計画」は、中心市街地の将来像を「水都(みなと)にいがた あじなまち」としている。「水都にいがた」は、信濃川、日本海、港町など「水、みなと」をまちの個性とし、国内外の人々が集う、心ときめく交流の舞台を意味する。また、「あじなまち」は、心を感動させる趣のあるまち、暮らしやすく、来やすい心配りのあるまち、新しい価値や文化が創造されるまちを意味し、また、豊かな自然風土に生まれ優れた「食」を活かすことも意味する。

### (3) 新潟都市圏ビジョン

2002(平成14)年5月に「新潟都市圏ビジョン」が新潟都市圏総合整備推進協議会(当時の新潟市及び周辺の13市町村)により策定された。同ビジョンは新潟都市圏の将来都市像を「田園型政令都市・新潟」とし、大都市としての特性「政令都市性(=大都市性)」と都市圏全域の大きな特性である「田園都市性」という2つの特性が調和・共存した都市を目指すこととした。



「新潟都市圏ビジョン」が描く将来都市像 (資料:新潟市ホームページ)

同ビジョンは、以下の2つの基本理念と5つの「目指すべき都市の姿」を掲げている。

〔基本理念〕

- ① 世界にはばたく交流拠点の実現
- ② 高次都市機能と豊かな自然環境との調和・共存

〔目指すべき都市の姿〕

- ① 活力ある産業が展開するまち
- ② 多様な交流ができるまち
- ③ 自然と共生できるまち
- ④ ゆとりと潤いのあるまち
- ⑤ 一人ひとりの思いを受けとめるまち

#### (4) 「アルビレックス新潟」の目指すもの

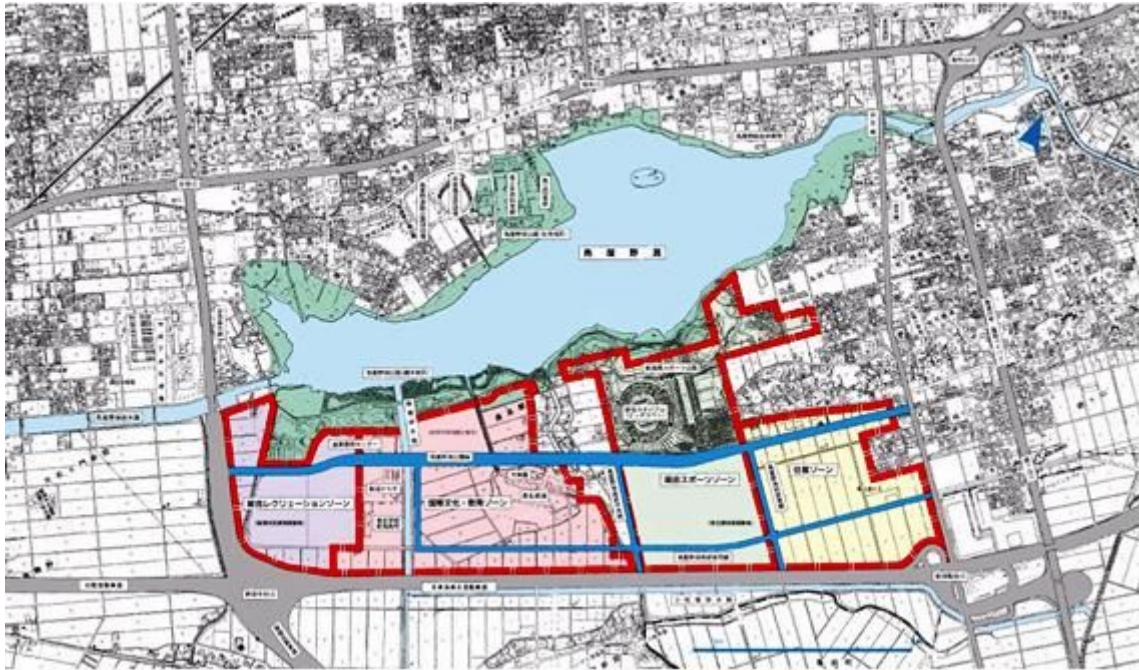
新潟市における以上の様々な計画を総括すると、新潟市は地域の「自然」を大切にしつつ、人々がいきいきと「輝き」、交流拠点として世界に「はばたく」都市を目指していると言える。新潟市の「自然」としてまず思い浮かぶのは数多く飛来する白鳥であるが、白鳥座でオレンジとブルーに「輝く」二重星が「アルビレオ」である。オレンジ色は新潟の美しい夕日、ブルーは日本海の美しさという新潟の「自然」を連想させるものでもある。「アルビレオ新潟」はそのようなところから命名されているが、その後、さらにパワーアップして「はばたく」ことを願って「アルビレ(アルビレオ)」+「レックス(ラテン語で王)」=「アルビレックス新潟」となった。

### 3. 取り組みの体制

サッカー興行等は「株式会社アルビレックス新潟」が担っている。主要株主は亀田製菓等170法人及び団体である。夕日のオレンジ色、日本海の青色をCIとして以下の事業を行っている。

- ① サッカー、その他各種スポーツ競技の興業及びその仲介
- ② サッカー普及事業としてサッカースクール7校(生徒約1,000人)の開講
- ③ 関連グッズの開発 等

行政は「新潟スタジアム(ビックスワン)」を「アルビレックス新潟」のホームスタジアムとして提供している。ビックスワンは鳥屋野潟南部開発の一面にある県所有の施設であり、新潟市も管理料の一部を負担している。新潟市は当初「アルビレックス新潟」の試合に4万人の観客動員を行って「ビックスワン」を満員するという目標を立てた。そのため市は観客動員に自治会組織を活用する方針を立て、各自治会長を通して自治会会員に試合観戦の無料券を配布した。



新潟スタジアム(ビッグワン)周辺開発 (資料:鳥屋野潟南部開発計画土地利用ゾーニング)

#### 4. 具体策

##### (1) 主な経緯

1992(平成 4)年、新潟市はワールドカップ 2002 開催候補地に立候補し、1996(平成 8)年に開催地に決定すると、当時地域リーグで活躍していた既存チーム「新潟イレブン」(サッカー愛好者の集まり、昭和 30 年頃発足)を発展的に組織変えて「アルビレックス新潟」を設立した。ワールドカップ開催までの経緯は以下のとおりである。

1993 年	ワールドカップ日本招致
1994 年	アルビレックス新潟発足
1996 年	北信越ブロック開催地決定
1998 年	アルビレックス新潟JFLに昇格
1999 年	J2 加盟
2001 年	「ビッグスワン(新潟スタジアム)」完成
2002 年 6 月	ワールドカップ開催

新潟市では従来大きなスポーツ競技大会が行われることが少なかったが、サッカーワールドカップが開催されたことを契機に、スポーツ大会への関心が高まった。その後「アルビレックス新潟」のサッカー試合が身近で観戦できるようになり、スタジアムには毎試合 4 万人近い観客が詰めかけている。最近では女性の観戦者に加え高齢者も含めた中高年者層の観戦者が増加し、スポーツが市民にとって日常的な楽しみ、関心事になってきている。「アルビレックス新潟」は 2003 年に J1 に昇格し、日本一の観客動員数を実現した。そして 2003 年、2004 年と 2 年連続して「J. LEAGUE Awards」の「Join 賞(チェアマン特別賞)」を受賞した。

## (2) アルビレックス新潟支援事業

1999年、アルビレックス新潟のJ2参加にあたり、新潟市はホームタウンとして、Jリーグの理念にある地域密着型のスポーツクラブ確立に向けて支援することを決めた。支援の目的は以下にあった。

- ① 2002 ワールドカップ新潟市開催の機運醸成
- ② サッカーの振興と青少年の健全育成
- ③ スポーツ振興と地域の活性化

支援の方法は直接「アルビレックス新潟」に補助金、助成金を出すというのではなく、間接的なものになっている。例えば、新潟市が試合のチケットを購入して次代を担う小中学生を対象にスタジアムの感動を実感できるような観戦招待事業を実施する、「アルビレックス新潟」に委託して市民のための「子供サッカー教室」「シニアサッカー教室」等を開催する、国際大会を招致する場合は開催費の一部を市が補助する等の支援を行っている。

## (3) 新潟スタジアムへの公共交通アクセス向上に関する実証実験

新潟スタジアムへの公共交通のアクセス向上等を図るための検討の一環として実証実験が実施された。実施日と内容は以下のとおりである。

〔社会実験の実施日〕

- |       |             |
|-------|-------------|
| <第1回> | 2005年11月23日 |
| <第2回> | 同 12月3日     |
| <第3回> | 2006年3月11日  |

〔社会実験の内容〕

シャトルバス、乗合タクシーを実際に運行して、スタジアム来場者へのアンケート調査、歩行者・自転車数を含めた交通状況の分析等を行い、シャトルバス利用者の増加要因やスタジアム周辺道路の交通状況の変化などについて評価した。

## 5. 特徴手法

行政は、Jリーグサッカーチーム「アルビレックス新潟」の誕生から自立まで間接的な支援を行いながら、地域におけるスポーツ振興を通じた地域活性化を図ってきている。2006(平成18)年3月に策定した「スポーツ振興基本計画」では「見るスポーツ」から「するスポーツ」まで市民にスポーツを浸透させる方針を採っている。人々がスポーツに関心を持つようになるにつれ、それまで北口に比べて通行量が少なく市街地整備が遅れていた JR 新潟駅南口から競技場までの沿道の商業が活性化しつつある。その経済効果分析は以下のように試算されている。

- |      |                      |
|------|----------------------|
| 直接効果 | 14億円                 |
| 波及効果 | 政策投資銀行調査21億円、県調査31億円 |

【参考】

〔表－1〕アルビレックス新潟が県内経済に与える経済効果

直接需要		
	入場料収入	5～7億円
	グッズ販売	3億円
	飲食費(サッカー施設内)	1億円
	広告関連	3億円
	駐車場・シャトルバス	1～2億円
	サッカースクール	1億円
	(小計)	14～17億円
間接需要		7～8億円
(合計)		21～25億円

(出典)平成16年度国民生活白書『第1章 地域で起こっている注目される活動事例』

(備考)1. 日本政策投資銀行の2003年のシーズンを想定した試算(2003年)より作成。

2. 直接需要は、データの制約上、サッカー施設外での飲食費、交通費の一部(鉄道ほか)、宿泊費などを含まない。

3. 間接需要(波及効果)は、新潟県産業関連表(1995年)を使い試算。

〔表－2〕地元への貢献度

(単位:%)

区分	非常に 貢献している	貢献 している	どちらとも いえない	貢献して いない	全く貢献 していない
新潟のイメージアップ	60.1	30.4	8.7	0.7	0.1
地元意識の向上	48.4	34.7	15.7	0.8	0.3
地元経済の発展	38.9	37.0	22.0	1.6	0.6
青少年の健全育成	38.4	36.2	23.0	1.5	0.9

(備考)1.アルビレックス新潟「Jリーグ観戦者に関するアンケート調査」(2003年)により作成

2. アルビレックス新潟の地元への貢献度に関する問に対して回答した人の割合

3. 回答した人は、2003年8月2日のゲームでアルビレックス新潟を応援する観戦者961名

## 6. 今後の課題

「アルビレックス新潟」は、新潟中越地震の際には義捐金の寄付や生活支援物資(タオル、冬物ウェア等)の提供、義捐金募金活動、災害復旧ボランティアへの協力等を行い、日常的にも地域のスポーツ普及活動の展開、雇用拡大を図るためのインキュベーション組織の立ち上げなど様々な地域密着型の活動を行ってきた。これらの活動がまち再生活動により広く波及していくよう関係者の協働が引き続き期待される。

(参考、引用文献)

新潟市ホームページ、アルビレックス新潟ホームページ

新潟市鳥屋野潟南部開発計画ホームページ